



TITLE:

知っておくためになる論文執筆術「インパクトある研究成果公開のために」<京都大学附属図書館・京都大学学術出版会共催講演会>([配布資料] 何を誰にどう伝えるか?: オープンアクセス時代の学術編集あるいは執筆術 / 鈴木哲也)

AUTHOR(S):

小田, 涼; 鈴木, 哲也

CITATION:

小田, 涼 ...[et al]. 知っておくためになる論文執筆術「インパクトある研究成果公開のために」<京都大学附属図書館・京都大学学術出版会共催講演会>. 2013

ISSUE DATE:

2013-11-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/179506>

RIGHT:

何を誰にどう伝えるか？
——オープンアクセス時代の学術編集あるいは執筆術——

京都大学学術出版会 鈴木哲也

I Publish or Perish から Publish and Perish? へ：

学術コミュニケーションの再構築が求められる時代

- 1 急速に増大する発表論文数
STM 分野の年間発表論文数 1988 年／2008 年ではほぼ 2 倍
世界の主要学術誌に発表された日本の研究機関が発表した論文数 1.7 倍
(平成 22 年度 科学技術白書から)
- 2 オープンアクセス／オンライン化／電子書籍時代の到来
- 3 本当に「読まれて」いるか？ 1：引用の狭域化
“Survey Finds Citations Growing Narrower as Journals Move Online”
“Electronic Publication and the Narrowing of Science and Scholarship”
(Science 2008年6月18日号)
- 4 本当に「読まれて」いるか？ 2：「学術成果」か「情報」か？
総合性・体系性の軽視に対する研究者の懸念
・国文学界の「自己批判」？ 国文学データベースの功罪
・「ネットカルチャー」と「アカデミックカルチャー」

II 劣化する学術書ビジネス

- 1 実は「総合性・体系性」のニーズに実は答えてこなかった学術出版
学術コミュニケーションの様変わりにも頓着
「フローとしての知」の登場→もはや、個別事実は覚える必要がない？
- 2 「編集なき出版」と結果としての市場の衰退
- 3 電子出版の登場とその担い手の問題
ますます低質化する危険

III メディアの仕分けが必要

- 1 本／ジャーナル／紀要／オープンアクセス——発表メディアの原理的仕分けを
読者と目的から考える

読者	目的・内容
紀要論文 ごく近い同好者（本当は？*）	「成果」以前の短期的創作

雑誌論文	やや近い同業者（同一学会の会員）	競争可能な「成果」
学術書	同業者とは異なる人々へ	「二回り外」へ普及・教育

- 2 オープンアクセスや電子出版の役割と意味
ロングテールかどうかは疑問だが、完全な孤立的発表状況からは脱する
一種の accessibility／一種の discoverability
- 3 「それでも本が必要」という現実
 - 1) 研究のセンスを磨くには
体系的、統合的な知（学と識、そして技）の集積は必要
「ある規模の広がりをはきちんと俯瞰することで、厚みのある研究者が育つ」
 - 2) 読書人、恐るべし
西洋古典叢書の経験から
 - 3) もし『種の起源』が電子ジャーナルの掲載論文だったら？
- 4 情報を「身体化」させる（教育的）課題

IV 原理的問い直しと「学術編集」の構築

- 1 「新しい学術コミュニケーション」の要件
 - ・速報性と領域性／非速報性と汎領域
 - ・国際性と国内性
 - ・学術研究の深さ（歴史性・階層性）と、広さ（パラダイム指向的意味）の提示
 - ・多様な技術・メディアの効果的利用
- 2 学術編集の要点と技法
 - 1 コンテンツの性格／技術適合性に応じたメディアの選択
「紙の本」が有効であり得るもの／紙であることによる限界があるもの
紙である必要のないもの／紙でないことによって公開が可能になるもの
 - 2 研究、教育の目的に応じた編集コンセプト
 - 3 読者を措定した記述技法

V ではどうするのか？ 「京大執筆メソッド（論文から本へ、論集から本へ）」β版

【全体的な留意点】

- 1 読者の措定と記述イメージ
一般的に、いわゆる「領域的な専門書」と言われるものでも、読者を著者自身の研究領域の「2回り、ないし3回り外」を意識すると、可読性が高まる。すなわち、本書のテーマに関心を持ちうるが、それを理解するための領域的なトレーニングが欠けている、ない

し、対象に関する基本的情報に欠けている人々。具体的には、ちょっと離れた専門領域の研究者や、学部学生に、本書の面白さを語る場面を意識していただければ良いかと思えます。

2 内容の意味（意義）の呈示

したがって、著書全体、あるいは各章の内容の持つ意味（意義）を、上記のように指定した読者の関心に合わせて、具体的に示すのが効果的。テーマの「広領域性」「現代性」と言い換えることも出来る。

【編成と論述の留意点】

3 章と章の間の関連性を読者に意識させることが論集最大のポイント

本書で既に論じた、あるいはこれから論じる事柄との関係を示すような工夫は、非常に効果的。読み合わせすることが最も良い方法だが。

4 重複の回避は最も基本的ポイント

記述の適度な重複（読者に既知の事柄を想起させる上での）は効果的でもあるが、何度も、あるいは大幅に記述が繰り返されると、既視感が強くなり、気になる。どうしても重複させたい場合は、「前述のように」などの一言を加える。

5 本書全体のメッセージ（テーマ）との関わりを常に意識する記述

この点では、一般に良く行われる、「各論を読んで序章を書く」というスタイルは注意を要する。理想的なのは、下記のような流れ。

序章の骨子（主要メッセージ）を全員で確認	↓
それを意識した各論の執筆	↓
読み合わせと、「役割分担」の調整（重複の調整も含む）	↓
各論のリヴァイス	↓
最終的な序章，終章の執筆	

6 防衛的な記述の回避

論文、特に学位論文のように批判を前提として書かれる論文の場合、「～と思われる」「～と推測される」と言った、「おずおずとした」自信なげな調子の表現が多くなりがち。しかし、読者は学位審査の主査や副査ではないので、著者の思いきった議論を待っているのだから、こうした表現はインパクトを削いでしまう。「だ」「である」と言い切るか、せいぜ

い、「～と言える」、「～と言えよう」などの表現をとるべき。時には、「～と言えるのではないか」という問いの形式をとるのも、効果的。

7 思い切った議論の呈示とキーワード化

前項と重なるが、個別記述だけでなく、本（章）全体のメッセージの行き先を、思い切った高みに置いてしまう大胆さは必要。「物語」にならない範囲と手法で、パラダイム指向的に、これまでの研究史や通説を乗り越える（乗り越えうる）、あるいは、これまで不明であった点を説明できる（説明しうる）といった、志の大きさを示す必要がある。

この点では、自らのセリングポイントをキーワードで示すのも、有効な手法。

【魅力的な書き出し】

8 「書き出し 10 行、10 ページ」で、作品の魅力の半分は決まる。

エピソード——古典的だが今も有効な手法の一つ

読者の普遍的関心や時代的トレンドとの関係で研究を意味付ける書き出し

9 アブスト（本の場合は「帯」や宣伝文）の悪例と改善例

「誰でも知っている」ことでは陳腐

読者が知っているようで知らない事柄で要約する

近刊『飛行機の技術史』から

【専門的な記述に関して】

10 専門概念や研究史の呈示（1） 一般的考え方

内容的な意義に関心を持っても、領域外の読者の場合、そこへのアプローチの方法や視角といった点では全く無知と思って良い。したがって、いきなり個別的な概念を前提に書くと、読者は距離を感じる。一般的には、大学院生でなければ身につけてないような事柄は、一応説明しておくべき。

その際、当然研究史に触れることになるが、先行研究を列挙するような研究史の呈示は避けるべき。一人ないし二人の研究者の名を挙げて、その理論枠組や方法の内容や意味を示す程度に。それ以外は思い切って省くか、どうしてもそれ以上に触れる必要がある場合などは、注で示す。

11 専門概念や研究史の呈示（2） 用語

議論の枠組に関わるような事柄については丁寧に説明するとして、よりアドバンスな、あるいは多少周辺の事柄については、本文で記述するとかえって煩雑な印象を与える。注やボックス（囲み記事）、あるいは用語解説と言った手法で説明するのが適当。

また、意外と盲点になるのが、地名や人名。一言加えるとずっと可読性が高まるのだが。

例 カリマンタンのクチン

→ボルネオ（カリマンタン）の西端サラワクの主要都市スマタンから東へ 100
キロの町クチン

12 数値データの呈示

当然、エビデンスをきちんと示す必要はあるが、領域外の読者にとっては、論理としての正しさが確認できれば、細かなデータを追っていくような読み方はしないのが一般的。むしろ、細かなデータの羅列が続くと、敬遠しがち。そこで、数値データは図表に纏め本文には細かく記さない、その図表自体、巻末にアペンディクスとしてしまうなどの思い切りも必要。

図を上手く使うのも一手だが、その場合でも、細かなデータをプロットすると言うよりも、大きな動態が直感的につかめるようなものを。

13 計量的アプローチ等における解析方法の提示

解析の方法（たとえば分散分析等）を呈示したり、数値呈示の際に、解析方法に応じた条件提示をすることは論文に於いては必須だが、計量的でない学問領域の読者にとっては、過剰に専門的な印象を持つ場合もある。注で述べるか、思い切って省くのが得策。

【タイトル・ヘディングについて】

14 「制度的論文」タイトルの回避

「問題意識と論点」、「方法と構成」のような投稿論文的な見出しは絶対に避けたい。また、各章に「はじめに」「おわりに」が連続するのも、目次を一見したとき単なるアッセンブリのように見えて、本としての統合度が弱く見えてしまう。各セクションでの「売り」（主要な課題、特徴的な主張など）を際立たせるように、見出しを工夫する。

他にも、言葉の繰り返しや、単なる「テーマ」のみを掲げた見出しも、単調さを助長するので、避けるべき。

【悪例の中から】

- | | |
|-------------|---------------------|
| 1 投稿論文的見出し | 何の論文であるかさえ分からない場合も！ |
| 2 単なる時系列的羅列 | 歴史分野などでありがち |
| 3 同じ語句の繰り返し | キーワードもここまで繰り返すと逆効果 |

15 対象を限定するような見出しの建て方は避け、極力議論の「大きさ」を示すようにすべき。また特徴的な概念や事象をキーワード風に見出しに立てるのも一つの技法ではあるが、目次を一見して、読者がすぐにピンと来ないようなものは逆効果。

【統合度を高める具体的技法】

16 本書全体の中での個別論文の寄与を明確にするため、各章の冒頭とまとめに、序章で呈示されたキーワード、主メッセージをそれぞれ一回は意識して使用する。

17 章と章の間の統合を明確にするために、最低1つ、できれば3つくらい、本書の他の章を参照、引用、援用する。

18 術語はもちろん、用字、用語も出来るだけ統一する。特に術語については、統一出来ない場合はその理由を記す。

19 文献、数字、注形式その他の表記の統一は絶対的。また出来れば参考文献は巻末に統一する。

20 索引は編者、編集者側が作成し、個別著者に示す。その逆の場合は、相当な調整が必要。